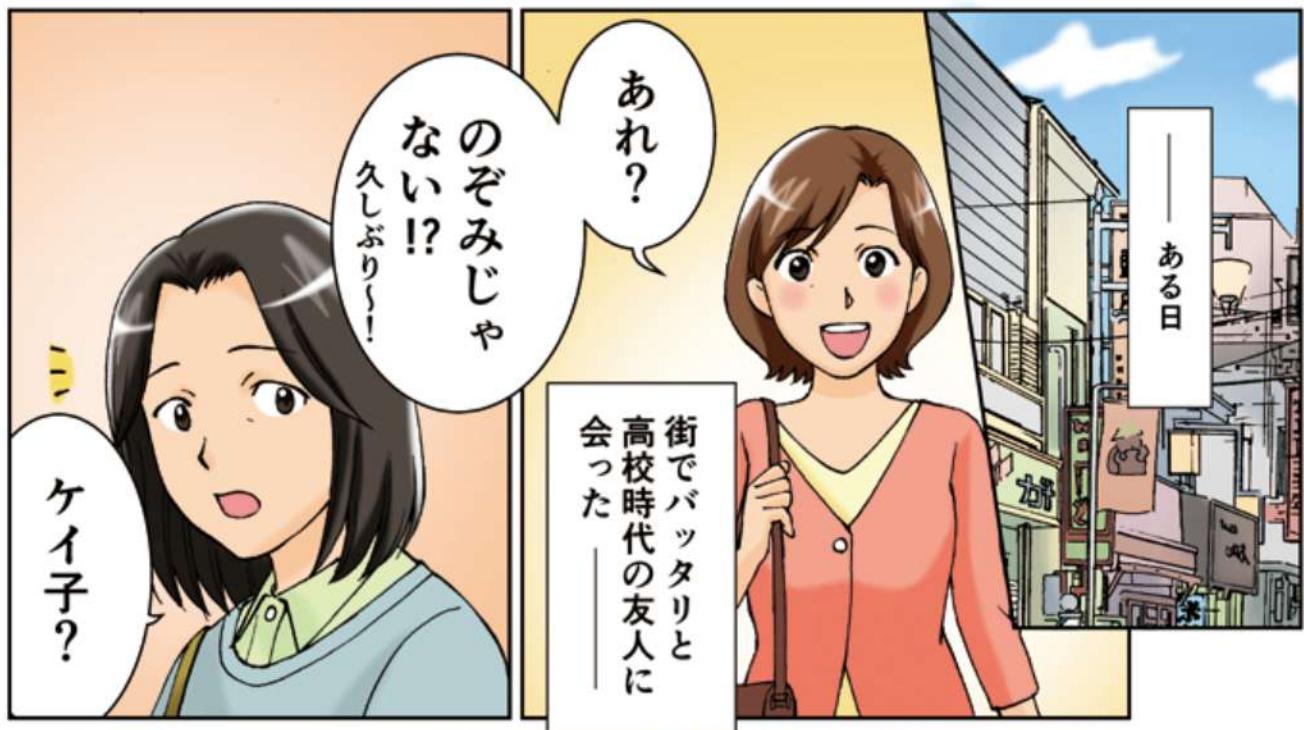
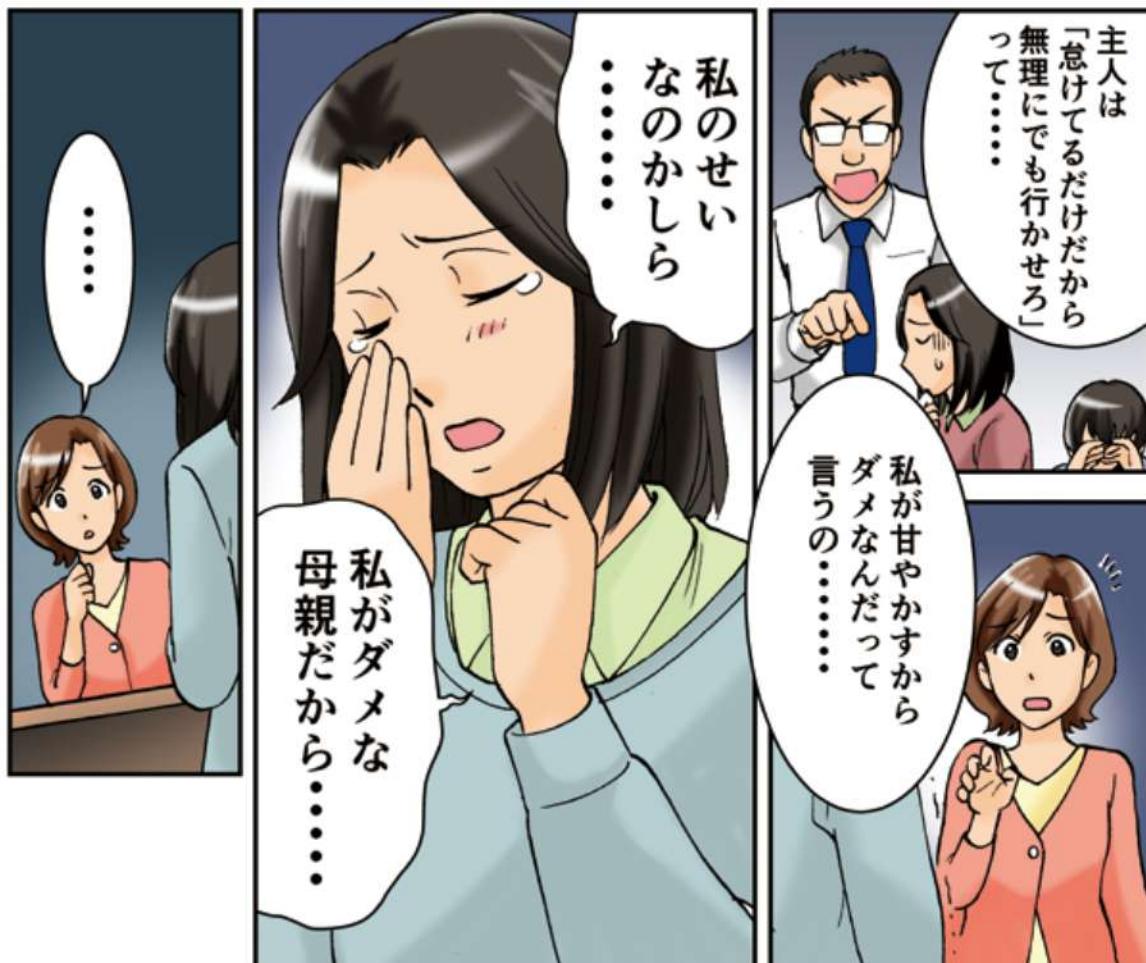


コロナ禍で 「自分」を生きる













俺たち自身も
以前は子どもが
不登校になる
なんて他人事だと
思ってたから、



その他に
「不登校問題が
炙り出した学校の
矛盾」という話も
あって、



身边に
いろいろな矛盾が
潜んでるんだな



コロナ禍で「自分」を生きる

（要旨）

「コロナ禍」すでに存在した

日常の矛盾が炙り出された

新型コロナウイルスが現れたことで新たに出てきた問題は、新型コロナウイルスの「感染の危険」であり、「死の危険」です。その危険に対応し感染がこれ以上広がることを防ぎ、死から人命を守らないといけません。

心理臨床家として長年にわたって子どもと学校教育に向き合い、多数の著作も執筆しておられる高垣忠一郎氏の講演記録をご本人から頂きました（要旨編集は「研究会」）。この困難なコロナ禍の時代、子どもをどう理解し向き合うのか……大変示唆に富む内容です。

子ども未来研究会 in 寝屋川

神的な問題が生じました。ウイルス感染危険の防止のために、企業の生産活動にダメージを与え、労働者の仕事に跳ね返りました。ステイホームという不要不急の外出自粛によって仕事や経済的な問題、家庭内に生じる問題など、とりわけ貧困家庭や経済的に困窮している弱い立場の人たちの日常に抱える矛盾が

登校問題」というものが、世間にあまり知られていなかつた

頃「登校拒否、不登校が“うは遊んではいけません」と言わ

れた事例です。まるで、登校拒否・不登校が「感染症」のよう

にみられ、その子どもと一緒に遊んだら、それがうつるかのように、恐れられたのです。

不登校の子どもが日本の社会に登場し始めたのは、1950年代の後半からでした。その子どもたちがうなぎ登りに増え始め、社会問題になってきたのが、1970年代の半ばからでした。オイルショックで、右肩上がりの高度経済成長が終わりを告げ不況、低成長の時代に入り、「受験フィーバー」と言われる時代が始まりました。その時代から登校拒否・不登校の子どもが急激に増え始めたのです。不登校問題は、日本社会の大きな変化の流れに影響

登校拒否・不登校問題から

今日の社会の矛盾を見る

わたくしは心理臨床家として、主に登校拒否・不登校問題に長年かかわってきました。その観点から、お話をします。新型コロナウイルスの感染という問題が生じたとき、すぐにわたしの頭に浮かんだのは「登校拒否・不

同時に、経済的、心理的、精

が色濃くなってきたことによる矛盾が吹きだした問題です。

不登校の子どもをもつ

親の抱えた矛盾

相談にこられるのは、大抵お母さんです。わたしはまず来談されたお母さんの労をねぎらいました。そうすると、大抵のお母さんの目に涙が浮かびます。あるお母さんは「先生、わたしねえ、子どもが不登校になつてから、近所歩けなくなりました。」とおっしゃいます。へどうしてですか？」「わたしは子どもを不登校にしてしまったダメな母親です。」という貼り紙を背中に背負つて歩いているような気持ちになりますから・・・」とおっしゃいました。お母さんは「この子を殺して私も死のうかと思いました」とか、他人には言えない、つらい気持ち、怒り、悲しさ・・・を吐きだされます。そういうお母さんの中には「先生に自分のつらい気持ちや、しんどい気持ちを洗いざらい吐き出して、それをしつかりと聴いて受けとめてくださる。そうすると、心が軽くなるのです。

そのことを実際に経験して、気づいたことがあります。」とおっしゃる方がいます。△何に気づかれたのですか？△「ここで話を聴いていただいて、心が軽くなつて家に帰ると子どもをまるごと受け容れられるのです。そうすると、子どもを冷静に見てやれるのです。そのことを私が経験して気づいたのです。ここで私が話を聴いていただいたように、それを私が子どもにしてやならないといけない。

それなのに、私は自分の不安や焦りの気持ちを子どもにぶつけるばかりで、子どもの気持ちに耳を傾けてやれていませんでした。それでは、子どもの気持ちも落ちつきませんよね」とおっしゃいます。

不登校問題によつて

炙り出された

学校の抱えた矛盾

校内研修に招かれたときに、わたしは最初に先生方に質問しました。「のつけから、失礼な質問をさせていただきますが、先生方自身、学校にくるのが楽しくない方が多いではないですか。そんな学校に子どもだけが楽しく通えるはずがありますか？」と問題を投げかけます。

なぜ、そんな質問を敢えて最初にさせていただいたか？「登校拒否・不登校」の問題を向こう側にいる、特別な子どもの特別な問題のようにみる見方を根底から変えていただきたからです。「この問題は日本の社会に住む私たちみんなが抱える『生きづらさ』の問題で、その『生きづらさ』が色濃くなってきたことによる矛盾が吹きだした問題です。

た。「では、子どもたちの笑顔を思いたい。浮かべたら、今日も勇んで学校に行こうという気持ちになるけれど、いざ玄関を出かかると、なんだか気が重くなつて休みとなることがあるという。先生いらっしゃつたら手を挙げていただけですか？」少ないところで3分の1、多いところで3分の2の先生方の手が挙がります。

周囲の様子を窺つたり、前に座つておられる管理職の顔を窺つたりのその手をあげ方で、その学校の雰囲気がわかるような気がしました。「ほら、ごらんなさい。先生方自身、学校にくるのが楽しくない方が多いではないですか。そんな学校に子どもだけが楽しく通えるはずがありますか？」と問題を投げかけます。

学校に通う子どもに現れただけのこと

です。だから、わたしたち自身のかか
える足元の問題なのだととらえていた

だきたい」 こんな風に話を始めまし
た。

そして、話のなかでは、ある家に不
登校の子どもが現れると、かならずそ
の子の両親の夫婦関係が問われます。
お父さんが、子どもに異変が起こった
とき、妻と一緒に子どもと向き合え
る、そういう家庭では不登校の子ども
が元気になつていく可能性は開かれま
す。その子が不登校になつたのはお前
の責任だと母親が責められたり、お母
さんだけが子どもとむきあうような家
庭では、問題の解決が難しくなりま
す。

学校でも同様で、その学校に不登校
の子どもが現れると、学校の教師集団
のあり方が問われます、先生たち同士
の関係が試されます。「あのクラスに
不登校が出たのは、あの担任がダメだ
からだ」と担任に責任が押し付けられ
るような教師の同僚関係では、不登校
の問題の解決も困難になります。「だ
から、校長先生にお願いしたいのは、

先生方の関係がよくなるような学校運営
をしていただきたい。・・・」 こんな話
をしてきました。

このわたしのはなしの妥当性は、全日
本教職員組合（全教）の教研集会の登校
拒否・不登校の分科会で確かめられています。
共同研究者として23年間参加して
きた私は、全国の登校拒否・不登校への
取り組み実践から学びました。登校拒
否・不登校の子どもが元気になるかかわ
りが実現できているレポーターの先生の実
践には、必ずと言つてよいほどに、周囲
の教師集団の支えがありました。

「生きているだけで 値打ちがありますね」 —いまを大切に生きる—

阪神淡路大震災から21年目（2016
年）のある日、わたしは広島のみなさん
に話しました。あの大震災のあと、ある
お母さんがカウンセリングのなかでおつ
しゃつた。「先生の大震災でわたしは
大事なことに気づかせてもらいました」
へなんですか？「生きているだけで値
打ちがありますね」「私の子どもは学校

には行つていません。でも私の目の前
で生きていてくれています。そのこと
のなんとありがたいことか。それに気
づかせてもらいました」「でも親はそ
のありがたさを子どもに伝えること
を忘れていました。そして勉強しなさ
い、いい成績取りなさい、いい学校に
行きなさい。こんなことばかり伝えて
います。それでは先生のおつしやつて
いる。自己肯定感は育ちませんね・・・」

大地震は建物を揺さぶりました。そ
れだけでなく、親のこころも揺さぶり
ました。そして競争社会を生きてい
て、いつの間にか心につけた垢がはげ
落ちたのです。「比べ癖」という垢、「世
間体」という垢・・・垢が剥げ落ちた
その中から自分の本心が露わになりま
した。それは「子どもが生きていくく
れるだけがありがたい」という心です。
前夜の懇親会でわたしの前に座つた父
と娘さんの話を思い出しながら話しま
した。そのお父さんは、わたしの本を
読んで不登校の娘と向き合つたそうで
す。そして、熱烈に今回の講演会の
講師として私を推薦してくださいました
といいます。お父さんは三つのことを決

めて娘と向き合つたといいます。

1 未来のために今を犠牲にしない

今を大事にするから
未来がある

2 他の子どもと比べない

3 子どもよりも 絶対に早く起きる

娘さんは7年間しつかりと不登校をして、不登校を卒業しました。彼女は19歳、目を輝かせてボクの話を聞き、話をしてくれました。

「ウイズ・コロナ」を 「ウイズ・マイセルフ」に

人類はいま、「ウイルス」という厄介な「殺し屋」に脅されて「生きもの」として「脅え」を感じながら生きています。いま「つらさ」を隠し「がんばる」子どもたちに共通する特徴は「生きもの」であることよりも、自分を「人材（予備軍）」と同一視して生きていることです。自分自身が「感じている

こと」よりも、自分の「値札」を気にしているのです。自分を「ダメ」「わるい」と評価し、自分の「存在丸ごと」を否定します。自分の正直な気持ちや感情を無視し、「生きもの」である自分を軽んじて生きています。「恐い」「悲しい」「辛い」「さみしい」「悔しい」などの自分の感情を押し殺して生きています。

だが、新型コロナという名のウイルスが現れて、人間に自分が「生きもの」であることを思い出させてくれました。

「生きもの」だからこそ、生命を失う恐れを感じることができます。その

恐れを感じながら、生命を脅かすウイルスと共に生きていかねばなりません。だから、子どもたちの過ごす「教室」が狭すぎることにも気づかせてもらいました。精一杯脅えながら、自分が生きものであり、生きているからこそ、いろいろ感じることができのだということ

を思い出せばよいのです。そうすれば、「ウイズ・コロナ」の毎日が、「ウイズ・マイセルフの人生」に目覚めさせてく

つまり、「コロナ禍」という厄介事が、「生きもの」としての自分自身と共に生きることです。

この大切さを思い出させてくれる絶好のチャンスになるのです。子どもを、人材予備軍としてではなく、なによりもまず「感じる」ことのできる生きものとして、その人間性や感受性を豊かに伸ばすことに対慮することができます。

新型コロナウイルスと共に生きるのは、そういうことだと思いませんか？



編　子ども未来研究会 in 寝屋川

高垣忠一郎

〔主な著作〕

生きづらい時代と自己肯定感【新日本出版社】
ついがんぱりすぎてしまふあなたへ【新日本出版社】
自己肯定感を抱きしめて 命はかくも愛おしい—
カウンセリングを語る—自己肯定感を育てる作法【新日本出版社】

自己肯定感ってなんやろう?—【かもがわ出版】
カウンセリングを語る—自己肯定感を育てる作法【かもがわ出版】



子ども未来研究会 in 寝屋川

コロナ禍で「自分」を生きる

発行日

2021年1月18日

発行所

子ども未来研究会 in 寝屋川

編集

子ども未来研究会 in 寝屋川

印刷

東京カラー印刷

漫画 /DTP

Mangaia（株式会社アンプス）

©子ども未来研究会 in 寝屋川